

内 外 彙 報

その像容の典據が聖德太子傳曆に「用明天皇二年（太子十六歲）天皇不念太子不解衣帶日夜侍病擎香爐祈請音不絕響云々」と傳へらるゝ御事蹟に従つたものである事は今更言ふまでもないが、孝養像が特に佛教徒の間に喜ばれて、南無佛像及び講讃像と共に太子像の代表形式となつた所以は、太子孝養の御事蹟を顯彰するにありしは固よりであるが、又一に太子十六歳の御時は日域佛法興隆の基礎を築いたとも言ふべき守屋退治、四天王寺造立等の佛教徒にとりて紀

明治大正美術史編纂事業の成立

帝國美術院に於て豫てより明治大正美術史編纂の意圖を有してゐたが、昭和七年一月同院聯絡委員會に於て、和田英作、結城素明兩會員より之に關する意見の開陳があり、正木院長も其の實現の希望を述べられた。

然るに朝日新聞社は昭和二年其の主催の下に明治大正名作展覽會を開催し、多大の成功を納めたので、其の成功を永久化して日本の美術界に貢獻せんが爲、同會の利益金二萬五千圓を有益に使用すべく考慮してゐた際なので帝國美術院は朝日新聞社と交渉し、其の結果同社は明治大正美術史編纂事業の爲前述の金額を帝國美術院に寄附する事となつた。

茲に於て帝國美術院では明治大正美術史編纂委員會を設置し、委員長に正木直彦氏を委員に帝國美術院會員結城素明、和田英作、高村光雲、香取秀眞の諸氏、帝國美術院幹事矢代幸雄及び朝日新聞社副社長下村宏の兩氏を定めて之が實行に着手するに至つた。

此編纂事業は年額金五千圓宛五ヶ年間繼續の性質を持ち、編輯部を帝國美術

念すべき事件のあつた年である事をも意味するものであらう。

本像は太子關係の寺院に於て製作せられたるものに非ずして、東海僻陬の一眞宗派寺院に奉祀せられてゐるのであるが、こは由來眞宗派の祖親鸞が、太子の俗體に座はしたる事を以て、太子尊崇を自宗開立の一方便としたるにより、眞宗派に於ては特に太子像、太子傳繪の類の製作が盛であつた事によるものである。

（正木）

院附屬美術研究所内に設けて、矢代委員の統轄の下に事務の進捗を計る事になり、委員會は適時開會し、編纂上の方針を決定する事になつてゐる。

編纂事業の主體は明治大正美術史資料の蒐集整理にあるも、同時に同期の美術史編述をも期し、蒐集せられた資料は美術研究所が管理して展覽會の開催其の他適當なる方法に依つて斯界の研究に資し、又完成せられた美術史或は編纂された資料も適當な方法で發表する豫定になつてゐる。

（尾崎）

美術に關する國際會議

隔年ヴェニスに開催される國際美術展覽會は、本年四月三十日を以て、その第十八回展覽會を開會した。主催國イタリアを初めとして、ドイツを除く他の殆んど全部の歐洲諸國及アメリカ合衆國の現代美術家及幾分回顧的な近代作家の繪畫彫刻を集めて壯觀を呈したが、本展覽會の開催を機會として、現代美術に關する第一次國際會議が、四月三十日より五月四日まで開かれた。

從來美術に關する諸種の國際的會議は履行はれたが、多くは美術史的或は考古學的問題の取扱を目的とし、斯界に多大の貢獻をなし來つた。本誌第五號に